

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

2011年8月2日

1. 基本情報

氏名：橘 誠
所属：日本学術振興会特別研究員PD
派遣形態：個人派遣

2. 研究テーマ

20世紀初頭におけるモンゴル・中国関係史研究

3. 派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

派遣先：アメリカ
都市名：インディアナ州ブルーミントン
研究従事機名：インディアナ大学中央ユーラシア学部
現地受入研究者：クリストファー・P・アトウッド教授

(2) 派遣期間：

2011年3月29日～2012年8月1日（総日数126日）

4. 主な研究成果

(1) 当初の計画概要

今回の研究の目的は、アメリカにおけるモンゴル研究の中心であるインディアナ大学中央ユーラシア学部において、当該分野で活躍する Christopher Atwood 教授のセミナーに参加するとともに、モンゴル研究に関連するチベット研究、新疆研究を行う Elliot Sperling 教授、Gardner Bovingdon 教授らと学術交流するとともに、これまでの自らの研究の成果をアメリカの学会において英語で発信することであった。

(2) 実際に達成された成果

派遣期間中、まずハワイで開催された Association of Asian Studies の年次会で、受け入れ研究者である Christopher Atwood 教授らとともに、4月2日、“Sex, Laws, and Incarnate Lamas: New Approaches on Mongolia’s 1911 Declaration of Independence”というパネルを組織し、“Mongolian Independence and International Law”と題する報告を行った。また、The Permanent International Altaistic Conference との共同開催となった The Mongolia Society の50周年会議において、7月13日、“Bogd Khan Government and Qinghai Mongols”と題する

報告を行った。その他、Christopher Atwood 教授のセミナー、講義に積極的に参加し、現地の学生との交流にも努めた。

(3) 今後の研究展望

日本語以外の言語、特に英語により自らの研究成果を発信することの重要性は夙に指摘されてきたが、今回の派遣を通じてそのことを改めて実感した。それは、日本では著名な研究者の研究成果が十分に理解されていないことから裏付けられる。派遣期間は終了したが、来年3月まではインディアナ大学において引き続き在外研究を行うため、機会を見つけて他の大学を訪問し、できる限り多くの学会において報告するとともに、それら報告の成果を英語で論文化していきたい。